

---

# セテカ!?

Keisue

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

セテカ！？

### 【Nコード】

N8841W

### 【作者名】

Keisue

### 【あらすじ】

ある朝突然コナンが女の子になっちゃった！？普通じゃ考えられないが、幼児化という異例があるからこそ成り立ちそうなもの。灰原詩音という偽名と共にまたまた面白可笑しく(?) たまに事件のストーリー... になります様に。

初投稿です!!!... ので、恐らくというか間違いなく駄文になると思いますが、それでも読んで下さるとい方は、どうぞ、お読み下さい！

## ある朝の出来事（前書き）

取り敢えず頭の切れる方ならタイトルの意味がストーリーを読まずに分かると思いますが。一応彼らはキャンプに来ているという設定です。

## ある朝の出来事

．．ふあゝあ。

欠伸？誰の？この声は工藤君のじゃないし、無論私でもない。このテントには私と工藤君、それに吉田さんしかいない筈．．．。でも吉田さんはまだ寝てるから、欠伸の主はやはり工藤君？．．．．．つて工、工藤君！？

ふあゝあ。

俺は欠伸をした。なぜこんな事を考えているのか？それは作者に聞いてくれ。まあ、取り敢えず欠伸してから30秒位そのままの状態でしたら、灰原が目を見開いていた。

「．．．なに？」

．．ん？声の高さが異常に高いような．．．。

まあ、それはいいとして、灰原からの返事は、

「．．．．貴方、気付いてないの？」

「．．．何を？」

「．．．．髪の毛、声の高さ、その他諸々。」

髪を触って見る。なんか長い様な．．声の高さはさつきも感じた通り、高い気がする。いや、高い。間違いなく。

「取り敢えずこのテントから抜けて近くのトイレで自分の姿でもみてらっしゃい。吉田さんが起きたら面倒だわ。」

「うん、分かった。じゃあまた後でね、灰原。」

「早く行つてきなさい。」

「じゃ。」

俺はさっきの事から恐らく身体が女体化したと考えていたので、女子トイレに入った。予想通りではあったが、実際にみると少し実感

がわからない。なぜか服も入れ替わってるし。この服は哀のよく着ているような服で、地味といえば地味。だけど自分にこの服が似合っているのが少し驚いた。顔立ちは哀にそっくり。髪は腰より5cmほど長い。．．が、別に重いわけではないのでよしとしよう。髪の色は．．黒髪と茶髪がまじっている。これは地の色であるうか。．．大体自分の姿を見終わって、まあこんなもんだらうと思い、哀の探偵バッチに連絡．．あれ？そういえば服が変わってるから探偵バッチを持ってない。代わりにケータイが入っていて、哀のケータイに電話して今戻るといって、明け方の空の下、テントに戻った。

「で、どうするの？これから。」

「どうするってたって．．どうするの？江戸川コナンはどっか行ってるって事にしても、私の事はどう説明していいのかが問題よね。」

「．．貴方、女言葉になってるわよ。」

「ん？男言葉の方がいい？だったら出来るだけそうするけど。」

「．．いえ、そのままでもいいわ。」

「哀ちゃん、コナンくん、起きて！」

「歩美がくる！！！」

歩美がテントに入ってきた。

「ご飯できたよ．．．って誰？」

「あ、えっと、あの、その、えっと、はっ、はっ、灰原詩音ですっ。」

「へ．．．で、コナン君は？」

「江戸川君なら偶々この辺に来ていた詩音と江戸川君の両親に会って一緒に行ったついでにここに詩音を置いてったって訳。」

「へ．．．ところで二人って顔が似てるね。もしかして姉妹？それとも双子？」

「．．．．双子。」

「ふーん．．．あ、自己紹介するね。取り敢えず二人とも出て！」  
「ちょ、ちょっと．．．」

(これから大変なことになりそうね。)

という思考を二人が持っていたのをお互いに知らない・・・が、まあよしとしよう。

コナ・・・じゃなくて、詩音と哀は歩美に手を引かれ、外に連れ出された。

「僕は円谷光彦です。」

「俺は小嶋元太だ！宜しく！」

「そして、私が吉田歩美！宜しくね。」

「(知ってるんだけど)宜しく。」

「俺達で少年探偵団をやってたんだぜ！」

「それにしてもお二人は顔立ちが似てますね。」

「双子だから。」

「灰原つて双子だったのか。」

「・・・ええ。」

「哀君、と・・・詩音君、ちょっとこっちに来てくれんか？」

「「ええ、いいけど。」

「ま、まさかきみは新一君かね？」

「ええ、そうよ。朝起きたらこうなってたの。」

「・・・三人だけなんだから、女言葉じゃ無くてもよかるうに。」

「いえ、演技とかそういう事をしないと自然になっちゃうから。」

「そうか・・・だったらいいが。原因は何なんじゃ？」

「分からないわ。これは流石に私でもお手上げ。」

「・・・博士、私は別に一生このままでも構わないけど。」

.....

しばしの沈黙。

口を開いたのは哀。

「だったらいいけど。少なくとも蘭さんには貴方がコナンだって事

は伝えておきなさいよ。工藤新一の声で一生帰れないともね。AP  
TX4869の解毒剤を今飲んだって高校生の女性にしかならない  
と思うから。」

「ええ、分かっているわよ。そんな事。」

「それじゃあ、そろそろ戻りましょう。皆お腹すかして待っていると  
思うから。」

「ええ。」

「き、君達、ワシの事は覚えてるおるか？おゝい・・・」

## ある朝の出来事（後書き）

えー、終わりました、第一話。

タイトルの意味、分かってない人の為、

せいテンカン

っていうか、分かってない人多いですよね。

まあ、衝動的に書き始めたんで、更新は兎のペース（最初に早く、途中でぶつとりという感じ）で行きますので。そうなたら最低1週間空きます。

本っ当にすみませんっ！え？何がって？気付いてない人はスルーしてください。これからは台詞の前に名前の頭文字（詩音なら詩、歩美なら歩、哀ならそのまま哀など）を入れます。．．．恐らく詩音が医学書とかに興味を持ちます。コナン君には、何が起きても推理小説好きのままがいい、という方にはすみませんが行は少なくなるつもりですので、見捨てたりしないで下さい。それにまだ恐らくですから。場面は想像にお任せします。表情も。



## 本拠地の報告（前書き）

えー、こんにちは。．．．まあ、Keisueです。前回30分程前に投稿した第一話に、はやくも脱字発覚。すぐに直しましたが、これからはきをつけねば。とは言っても二話目にこれっであり．．．ですよね？まあ始まります。どうぞー！

## 本拠地の報告

詩「．．．と、いう事よ、蘭姉さん。」

蘭「ちよ、ちよっと待って。貴方はコナン君で、原因不明の性転換した訳よね。」

詩「ええ、そうだけど。」

蘭「そして、新一が一生戻って来られないと思うって電話でいったのね。」

詩「ええ。相打ち覚悟で組織を潰すそうよ。」

蘭「だったら相談してくれば良かったのに。」

詩「相談したくてもできなかったそうよ。何しろその組織は組織を知っている者とその関係者全員を殺めてしまいうらしいから。勿論組織のメンバーは裏切らない限り殺されないうらしいけどね。私も少し組織の被害に遭ってそれも組織を潰す一つの理由らしいよ。」

蘭「そう．．．。ありがとう、コナン君。いいえ、詩音ちゃん。」

詩（これでは実際に組織を潰すだけけど．．．）  
ピリリリリ．．．

詩（電話か．．．ジヨデイ先生？）

蘭「これ使えば？FBIの人からでしょ？」

詩「ありがと．．．ってなにこれ？」

蘭「変声機だそうよ。コナン君の声で電話とかでなければならぬ時に使ってほしいって博士が。」

詩「そう．．．じゃ、遠慮無く使わせてもらおうかしら．．．  
もしもし。」

ジ『Hey! cool kid!』

詩（コナンの声）「ジヨデイ先生、どうしたの？」

ジ『ついに見つけたのよ！組織の本拠地を！』

詩（コナンの声）「本当に!?!」

ジ『ええ！明後日の午後十時に組織の本拠地に乗り込むけど、コナ

ン君も来るの？」

詩（コナンの声）「うん．．．行かないでおく。でも、潰したら連絡してね。絶対。」

ジ「分かったわ。約束．．．ね。」

詩（コナンの声）「絶対．．．絶対死んじやだめだよ！ジヨディ先生！それに、赤井さんも一緒に聞いてるんでしょ？」

赤「流石だな。」

詩（コナンの声）「二人が死んじやうなんて事は無いよね？」

赤・ジ「絶対死なないと約束するわ（しよう）。」

詩（コナンの声）「ありがとう。すべてが終わったら会おうね。じやあ、また。」

ピッ ツー ツー パタン．．．

詩「念を押して置いたから大丈夫だと思うけど．．．。」

蘭「大丈夫だよ。きっと。だから信じよ？ね？」

詩「．．．ありがと。」

蘭「何か言った？」

詩「いいえ。なんでももないわ。」

蘭「でも、ジヨディ先生って確か旅行でこっちに来てるって最初言っただけど．．．。」

詩「．．．そこだけは突っ込まないで．．．。」

蘭「はいはい。そういえばこれからはどこに住むの？」

詩「そっちがお望みとあらば阿笠博士のトコに移るけど．．．。」

蘭「じゃあこっちの望みは．．．此処に、居て？」

詩「．．．いいわよ。私は。でも、迷探偵（メイタンテイ）と言っているから蘭は気付かなかった。）さんの方に聞かなければならなんじゃないの？」

蘭「いいわよ。問答無用で承諾させるから。」

詩（こ、怖いわね。都大会優勝してるだけあって。）

力み過ぎて鉄球が潰れそうなくらい力が入っていた蘭であった。

新居・・・新部屋？（前書き）

こんにちは。keisueです。えー、色々と疑問点が出てくると思いますが、取り敢えずこれは夏休みの出来事ということにして置いてください。では、『セテカ!?!』第3話を、どうぞ。

## 新居・・・新部屋？

詩「あ・・・あの・・・さ。」

蘭「ん？何？」

詩「あ、いや、何でもない。」

蘭「？そう。」

詩（やっぱりいえないわね。こんな事。どうせ居候の身。寢床借りてるといふ事だけでも迷惑かけてるのに。）

蘭「????!!あ、もしかして自分の部屋が欲しいの？」

詩「・・・何で分かったの。」

蘭「だって貴方女の子になってるじゃない？だからお父さんの部屋で寝るのはやめておきたいけど、私の部屋だと迷惑が掛かるって思ってるんですよ。」

詩「凶星。」

蘭「これでも探偵の娘を17年やってるんだからね。あ、それで、空いてる部屋は無いけど、事務所を少しリフォームすれば一部屋くらいできるわよ。お父さんが名探偵になってからお金も結構たまってるから。」

詩「えつと、じゃあそうして貰おうかしら。」

蘭「じゃ、今業者さんに頼むから。」

詩「え・・・い、いくらなんでも決断が早すぎるんじゃない。。。」

蘭「いいの、いいの。お父さん間違いなく競馬とかパチンコとかですっちゃうから。こういう事に使ったほうが絶対いいって。」

詩「そ、そう。。。（これもこれで結構すると思うんだけど。。。）」

と、金使いの結構荒い蘭であった。

新居・・・新部屋？（後書き）

み、短い・・・前回などとは違って短い・・・しかもまたもや会話ばかり。それに加えて蘭と詩音しか出ていない・・・これは、ヤバイ。こ、このまま続けられるのか、僕は。ま、まあ次回もお楽しみ・・・？

## 夏休み明けの前日

詩「で、博士。何時の間に転入手続きを済ませたのかしら？」

博「一昨日じゃよ。一昨日。」

詩「それなら何故転入する張本人を立ち会わせなかったのか、教えてくれない？」

博「あ、いや、それは．．．。」

哀「その辺（なにをその辺に？）にしておきなさいよ、詩音。」

詩「分かったわよ。哀（呼び方変わってる）のいう事だし。それじゃ、ランドセルは今までのを使うから。」

哀「色が合わないけど（性別に）いいの？」

詩「いいんじゃない？指定されてる訳じゃないし。今まで使ってたやつの方が馴染みやすいでしょ。」

哀（なんか蘭さんが用意していそうだけど．．．）

ガチャ．．．

詩「ただいま．．．。」

蘭「お帰り！コ．．．じゃなかった。詩音ちゃん。はいこれ。新しいランドセル。」

詩「え．．．いらないんだけど．．．。」

蘭「なんで？姿が変わったんだから気分をあらためて学校に行けばいいじゃない。」

詩「でも．．．。」

蘭「でも、何？」

詩（．．．なんか返す言葉が見つからない．．．）

結局新品のランドセルを背負っていくことになった詩音だった。

## 夏休み明けの前日（後書き）

．．．ごめんなさい。．．．すいません。．．．あー、もう！何で此処まで更新にブレイキがかかってしまったのは、くっだらな理由なので書きません（書くつもり全くない）。しかもやつと更新できたと思ったら．．．短い。でも、よく話すね。この三人（蘭、詩音、哀）。次回もまた遅れに遅れて1週間後かもしれない。できただけ更新したいんですが、色々都合がつかなくて．．．ま、まあ頑張りますので。

P・S．お気に入り登録5件ありがとうございました！



## 初日の朝（前書き）

遅れてすいません！いや、しっかしなんで此処まで更新が遅れるんでしょうかね。まあ、勘弁してください。けーかく何にも立てないもので……。でも何で一回一回進行速度が遅いんでしょうね。ま、のんびり行きますんで、本編を、どうぞ！

未だに気持ちよくくろ就寝。

「。.....ZZZ.....」

詩「音といえは

7:00 目覚まし時計、無念の沈黙。

ビーーーーーゆゆゆうう  
.....「。.....」

詩「

ビ-----  
6:59 5, 4, 5, 5, 5, 6, 5, 7, 5, 8, 5, 9,  
.....「。.....」

詩「

~~~~~  
.....「。.....」

詩「

.....6:48 5, 8, 5, 9, 6, 4, 9  
.....「。.....」

詩「

~~~~~  
.....5, 4, 3, 4, 5, 6  
.....「。.....」

詩「

~~~~~  
.....「。.....」

詩「

~~~~~  
翌朝、6:30 4, 5, 4, 6, 4, 7  
.....

## 初日の朝

7:15

蘭「詩音！詩音！詩音ってば！」

詩「うん．．．（パチ．．．トロン．．．）．．．明美さん．．．？」

蘭「何寝ぼけてるの、詩音！もう7:15．．．20分だよ！学校、遅れるよ！」

詩「がっこう．．．学校．．．！あ、あ~~~~~！！！！！！！」

無念の目覚まし君をさしおいて、一気に目が覚めた詩音。

詩「えーっと、えーっと、筆箱にノートに、教科書に、腕時計．．．」

学校は8:30から。現在、7:45。学校まで、走って20分。

詩「いただきます！」

5分後．．．

詩「ごちそうさま！」

蘭「早ッ！」

現在7:52

詩「えっと、筆箱、ノート、教科書、ケータイ、腕時計、眼鏡．．．よし。」

8:01 11、12、13．．．

詩「いってきます！」

蘭「ちよっと待って、私も行くから。」

8:03

詩・蘭「いってきます！」

小（小五郎）「おー、行ってこい。（朝のあれ）（目覚まし）が騒々しくはやく起きちまったぜ。あれで起きねえってんだから、相当な強者（？）だな。ありゃ。」

．．．作者がいうことじゃないが、同感だ。

## 初日の朝（後書き）

今回はニュールームというか、ニュールームで起きる詩音がやつと。どんだけ苦労してんだよ！俺！五話目でやっと二学期の初日の朝って遅過ぎ！前回よりいくらか長いと思いたい。では、また次回にてお会いいたしましょう・・・ってカツコつけてんじゃねえ！自分！

（殴

ま、まあそういうことで、また次回をお待ち下さい。

## 初日の通学路

蘭「園子〜！ごめん、待った？」

園「あら、蘭、遅かったじゃない。いつもこんなに遅れないのに。」

蘭「この子が初日から寝坊しかけちゃって。」

園「あれ、そいえば誰？この子。」

蘭「ああ、この子は……。」

詩「灰原詩音。鈴木園子さんね。宜しく。」

あくまでも初対面の様に振る舞う詩音。

園「ね、ねえ、蘭？もしかしてこの子って……。」

蘭「そ。哀ちゃんの双子の……あれ？どっちだっけ。」

詩「妹。」

園「あ、そ、そう。」

園子さん、顔、引きつってますよ。

詩「あ、哀〜！」

哀「あら、詩音。遅かったじゃない。」

何か似たようなリアクションした人がいた様な……

詩「ごめんごめん。何かこっちの姿になって、体質が変わったらしくてさ。（小声。）寝坊したんだよね。」

哀「ふ〜ん……（工藤君記録に記録して置かなきゃね。）」

あ、あの〜、女史？何ですか？工藤君記録って。

詩「あ、もう始業のチャイムまで10分切ってるわよ。」

ちなみに探偵事務所から学校までは走って20分である。（歩くと30分）

詩（目線で）（走るわよ。）

哀（目線で）（ハイハイ。）

詩「じゃあ、また帰る時にね！蘭！」

蘭「うん、じゃあ、帰る時に〜！」

ギョーン！

園「うわ。あの二人走るの早ッ！」

スタタタタタタタ．．．．．

蘭「じゃあ、私たちも行きましょ？」

園「あ、待ってよッ！」

## 初日の通学路（後書き）

こんにちは、keisueです。またもや短い（のか？）（文。ま、いつか。別に。（よくね〜！）哀さん？工藤君記録ってやっぱりなんですか？彼、又は彼女の行動を全て記録しているんですか？

哀「あら、知りたいの？」

．．．げ。哀さん。どうやって此処に？確かそっちの世界にはここに入る術がない筈なのに。

哀「そんなの作ったに決まってるでしょ。」

え。ど、どうやって作ったんだ？

哀「あなたの世界に行ってドアノブ持つてってそれを精巧にコピーしただけよ。」

．．．あの滅茶苦茶複雑な回路のあれを。．．．すげえ。

哀「あんなの簡単でしょ？」

いや、あれ同じ色のコードがフクザツに絡み合ってるから簡単な訳ないんだけど。

哀「ま、じゃあね。作者さん。もっと長くてわかりやすい文を期待しているわ。」

．．．頑張ります。．．．。

哀「よし。」

ガチャ。ギイイイ．．．ボタン

はい、女史のおかげで後書きが長くなりました。

また次回も宜しくお願いし．．．

ガチャ

哀「します。」

ボタン！

．．．宜しくお願ひします。．．．。 （うっうっ。．．．）

## まだ続く初日の出来事

ガラッ

詩「失礼します。小林澄子先生はどちらにいらっしやいますか？」

「ああ、小林先生ならあそこにいるよ。」

詩「・・・あちらの眼鏡の先生でよろしいんですよね？」

「うん。」

詩「ありがとうございます。」

「・・・礼儀正しい子だなあ。」

詩「すみません、今日からこちらに通うことになった灰原詩音と申します。」

小林先生（これからは「小」とする）「あ、あなたが詩音ちゃんね。哀ちゃんから聞いているわ。もう少し経ったら教室行くから、待っててね。」

詩「はい。」

小（この子、哀ちゃんとは別の意味で大人っぽいわね。ちょっとやり難い・・・って、生徒にそんな事関係ないわ！しっかりしなさい！自分！）

詩「?????????あの、始業のベル、そろそろ鳴るんじゃないんですか？」

小「あら、ホント。じゃあ行きましょうか。」

詩「・・・はい。」

ガラッ

小「はい、皆席に着いて〜！」

ガタガタガタ・・・

小「え、まず、残念な事に、江戸川コナン君が転校してしまいました。」

歩「え？コナン君転校しちゃったの？」



小「ええ。そして、いいお知らせもあります。入って来て！」  
ガラッ

クラス全員「「え？灰原さん？」」

詩・哀「「なに（なんですか）。」」

小「えー、紹介するわね。灰原詩音さん。灰原哀ちゃんの双子の妹  
だそうよ。」

クラス全員（だからあんなに似てるのか（似てるんだ）。）  
詩「宜しくです！」

哀（クラスの大半が見惚れてるわ。しかも女子まで。あの顔には一  
瞬私でもクラッと来たわ。．．．強者．．．なのかしら？）

詩音はと言えば．．．

詩「（小声）小林先生、どこに座ればいいんでしょうか。」

小「（つられて小声）哀ちゃんの隣の席でいい？」

詩「（小声）はい。」

スタスタスタスタ．．．ガタタツ．．．ストツ．．．

詩「（小声）宜しく。これからも。」

哀「（小声）ハイハイ。」

小「はい、じゃあ国語の教科書の14ページを開いてください！」

．．．（ハッ）ガタガタ、ガチャガチャ、バタバタ、ドツカン。

今の擬音は何だった．．．以前に皆さん慌てすぎですよ。その中慌  
てていないのは灰原姉妹だけってどういう事ツすか？by：作者

生徒1「何ページ？」

生徒2「上巻？下巻？」

小「下巻の14ページですよー。開きましたか？」

生徒3、4、5「まだー！」

小「では早くしまししょうね。」

7・58秒後

小「準備できましたか？」

クラス全員「「はい！」」

小「では一時限目に入ります！」

ちなみにこの日の時間割は・・・

一時限目：国語

二時限目：数学・・・改めまして算数

三時限目：体育

四時限目：体育（継続）

給食

五時限目：美術・・・改めまして図画工作

帰宅

まだ続く初日の出来事（後書き）

はい、こんにちは、keisue . . .

哀「と、灰原哀です。」

. . . げ。女史。何時の間に。

哀「初回以来ね、貴方が連続で投稿したの。」

. . . すいません。

哀「そういえば前回の後書きで言ったわよね、もう少し長くしろって。」

. . . ごめんなさい。

哀「あと、なんで此処まで進行速度が遅いのかしら？」

. . . バタツ . . .

哀「あら、気絶しちゃった。まあ、いいわ。皆さん、また次回もコイツの文をお願いいたします。」

keisueの兄「まったく。世話焼かせやがって。誰があんたを現世に連れてくと思ってるんだ。」

ズルズルズルズルズル . . . ポイツ！

keisueの兄「次回もこの馬鹿の超駄文をお願いいたします。」

## 二時限目：算数

キーンコーンカーンコーン．．．

小「はい、じゃあ二時間目を始めますよー、席に着いてくださいね。」

ガタガタ．．．

小「今日は、二桁の足し算と引き算の筆算をやります。皆さん、教科書とノートを開いてください。ページは．．．上巻の64ページです。」

詩「．．．まだ二桁の筆算やってんの？うつつ．．．退屈だ。」

哀「そんな事言ってるから保ちきれなくなるわよ。」

詩「そんな事言ったって退屈なものは退屈なんだもん。」

哀「まったく。どうなっても知らないわよ？」

詩「少しはいたわれ。いくらフェイクでも一応妹何だから。」

哀「い・や・よ。」

詩「チエツ。」

小「じゃあ．．．この問題を．．．哀ちゃん、お願いできるかな？」

哀「 53

+12

65です。」

小「はい、よくできました。それじゃあ二番を詩音さん。」

詩「はい。73

-21

52です。」

小「はいっ。よくできました。じゃあ、三番を」

詩「うづうづう．．．。眠い．．．。まだ45分もある．

．．．ねえ、寝ていい？」

哀「ダメ．．．と言いたいところだけど正直言っても限界に近いのよね．．．。」

詩「じゃあ私は寝るね。」

哀「それじゃ、私も。」

詩・哀「おやすみ。」

キーンコーンカーンコーン．．．

詩・哀 パチ。（目が開いた音）

日直「起立！礼！解散！」

詩「うん．．．はあー。（伸びした。）終わったー。」

哀「．．．結局最後まで寝てしまったわね。ま、いいけど。」

．．．いいんですか。by：作者

光「お二人とも、授業中に寝てませんでしたか？」

詩・哀「．．．寝てた（ました）けど？」

それが？的な感じで言わないでくださいよ。by：作者

詩・哀「それがどうかしたの？」

光「あ、いえ、授業中に寝るのは小林先生に悪いのでは．．．と思つたのですが．．．。（この二人には理屈が通用しない気がします  
が．．．）

詩・哀「何で？数が．．．算数って退屈じゃない。」

光（やつぱり．．．。）

詩・哀「それがどうかしたの？」

光（またその“それがどうかしたの？”発言．．．）「あ、いえ、何でもありません。」

その頃1-B組先生の机では．．．

小（わ、私の授業ってそんなに退屈なのかしら．．．ちょっと凹むわ．．．。）

先生に筒抜け．．．いいのか？

## 一時限目：算数（後書き）

こんにちは。kei issueの兄のABC（仮名）です。弟が未だに気絶中なので・・・

（遠くから）もう起きとるわ！このクソ馬鹿兄貴！

あ、少々失礼。

ズカズカズカ・・・

ABC：（遠くから）オラ、誰の事じゃ！クソ兄貴ちゆうのは！

kei issue：（遠くから）おんどれの事じゃ、ボケ！

哀「・・・長くなりそうなので勝手に終わらせておくわ。ちなみにあの人達の兄弟喧嘩はまだまだ続きそうよ。まあ、次回までには終わってるだろうから後書きのストーリー（？）も宜しく願いますわ。あ、本編の方もまた宜しく願いますわよ。」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8841w/>

---

セテカ!?

2011年10月26日12時05分発行